



Kobe Shoin Women's University Repository

KARASHI-DANE

再帰化再考

著者	郡司 隆男
著者別名	GUNJI Takao
雑誌名	Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin : トークス
巻	13
ページ	1-14
発行年	2010-03-21
URL	http://doi.org/10.14946/00001492



再帰化再考*

郡司 隆男

Reflexivization Revisited

GUNJI Takao

Abstract

In this article, I will present reanalysis of the binding of Japanese reflexive *zibun*, which has the properties of subject-orientation and long-distance dependency, among others. By reconsidering my previous analysis (Gunji, 1987), and simplifying somewhat based on more recent framework, I will compare reflexivization in Japanese, on one hand, and languages like English, on the other, and clarify the characteristics of Japanese reflexives.

本稿では、主語指向性と長距離依存性という性質をもつ、日本語の「自分」を代表とする再帰形の束縛を適切に記述するための形式的な様式について、筆者の過去の分析 (Gunji, 1987) を今日的な視点から再考する。その結果、過去の分析の簡素化を企るとともに、英語などの言語における束縛の理論化と対比し、日本語の再帰化の特性を明らかにする。

1. はじめに

従来、日本語のいわゆる再帰名詞「自分」は、次のような性質をもつことが指摘されている。

- (1) a. 主語指向性: 先行詞は通常主語である。
- b. 長距離依存性: 先行詞は同一節になくてもよい。
- c. 階層的優位性: 先行詞は「自分」を統御する位置にある。¹

*本研究の一部は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究 (A) 「推論機構の言語的実現とその解釈メカニズムに関する研究」 (平成 19 年度～平成 22 年度、研究代表者: 田窪 行則、課題番号 19202012) および、基盤研究 (B) 「焦点・スコープ現象の統語・意味論的分析と音声実験・コーパス調査による検証」 (平成 21 年度～平成 24 年度、研究代表者: 西垣内 泰介、課題番号: 21320084) による援助を受けている。

¹ 「統御」 (command) は c-統御よりは限定された概念で、「A を支配する最下位の文が B も支配するとき、A は B を統御する」と定義される。「最下位の文」を「最下位の枝分かれ節点」とすれば通常の c-統御の定義になる。

Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin 13, 1–14, 2010.
© Kobe Shoin Institute for Linguistic Sciences.

d. 文脈依存性: 先行詞が文外にあると考えられる場合もある。

これらのうち、(1a–c) は統語的な性質であり、(1d) は運用論的に「先行詞」が決まる過程であると思われる。

本稿では、統語的に先行詞が決定される条件を定式化し、以下では、この意味に限定して、「束縛」(binding) という言い方をすることにする。また、運用論的に先行詞が決定される場合は「コントロール」(control) と呼び、まったく別のメカニズムによることを想定する。

以下では、まず、筆者の過去の分析を振りかえり、そこで捉えようとした性質を整理するとともに、より今日の枠組に適した形で再定式化することを試みる。その後、束縛の局所的な性質に重点を置いた英語などの言語の分析と比較し、日本語の再帰化の特徴を明らかにすることを試みる。

2. Gunji (1987) の分析

2.1 オリジナルに近い形

Gunji (1987) は、GPSG (Gazdar, Klein, Pullum, & Sag, 1985) の枠組による日本語の分析を示したものである。「自分」に関しては、(1b) の長距離依存性に注目し、FOOT 素性²として、REFL という素性を設定し、「自分」が語彙的に REFL 素性の値として主語名詞句のリストをとり、「自分」とその名詞句の意味的指標が同一であるとしている。Gunji (1987) の (4.37a) (p. 116) を今日の HPSG の記法に置きかえて記述すると、「自分」の語彙記述は、おおむね次の (2) のようになる。³

(2) Reflexive

$$\left\langle \text{「自分」}, \left[\begin{array}{l} \text{SYN} \left[\begin{array}{ll} \text{HEAD} & \textit{noun} \\ \text{SUBCAT} & \{ \} \\ \text{REFL} & \langle \text{NP}[\text{sbj}; \text{BRFL } +]_i \rangle \end{array} \right] \\ \text{SEM} \left[\begin{array}{ll} \text{INDEX} & i \end{array} \right] \end{array} \right] \right\rangle$$

ここで、 $\text{NP}[\text{sbj}; \text{BRFL } +]_i$ は、次の (3) の略記であり、主語の名詞句をあらわす。GR は文法関係 (grammatical relation) をあらわす素性である。⁴

²GPSG の後を継いだ HPSG (Pollard & Sag, 1994; Sag, Wasow, & Bender, 2003; Kim & Sells, 2008) の用語では非局所的素性 (nonlocal feature)。

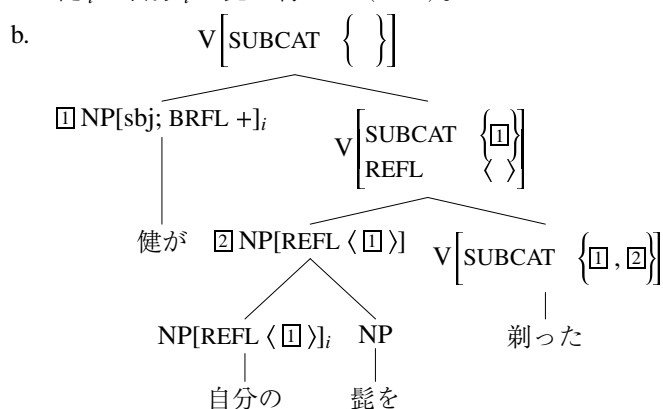
³Gunji (1987) では格助詞のついた名詞句を PP としているが、本稿では、格助詞の存在は無視して、一括して NP として扱う。

⁴BRFL 素性については後述。

$$(3) \left[\begin{array}{c} \text{SYN} \\ \text{SEM} \end{array} \left[\begin{array}{c} \text{HEAD} \\ \text{SUBCAT} \\ \text{INDEX} \end{array} \left[\begin{array}{c} \left[\begin{array}{cc} \text{GR} & \text{sbj} \\ \text{BRFL} & + \end{array} \right] \\ \{ \} \\ i \end{array} \right] \right] \right]$$

これに基づき、例えば、次の (4a) は (4b) のような構造をもつ。⁵

(4) a. 健_i が自分_i の髭を剃った (こと)。



ここで、REFL は FOOT 素性であるので、次に示す FOOT 素性原理 (5) に従い、その値である NP[sbj; BRFL +]_i は、「自分の」および、それを支配する「自分の髭を」に対応する NP によって共有される。⁶

(5) FOOT Feature Principle (Gunji, 1987, (2.25), p. 15))

親節点の非局所素性の値は子節点の同じ素性の値の和集合と単一化する。

(5) で、「自分の髭を剃った」に対応する動詞句は (6) の形をしており、(7) のコントロール原理によって認可される。

(6) Reflexivization Structure (Gunji, 1987, (4.40), p. 118)

⁵以下、次の (ia) のような記法は (ib) の略記である。

$$(i) \begin{array}{ll} \text{a.} & V \left[\begin{array}{c} \text{SUBCAT } \alpha \\ \text{REFL } \beta \end{array} \right] \\ \text{b.} & \left[\begin{array}{c} \text{SYN} \\ \text{HEAD} \\ \text{SUBCAT} \\ \text{REFL} \end{array} \left[\begin{array}{c} \text{verb} \\ \alpha \\ \beta \end{array} \right] \right] \end{array}$$

⁶「単一化」(unification) とは、素性構造が素性値を共有することであるが、完全なる同一性とは異なり、一方の素性値が未定の場合も含む。

$$M \left[\begin{array}{c} \text{SUBCAT} \\ \text{REFL} \end{array} \left\{ \begin{array}{c} \boxed{} \text{NP}[\text{subj}; \text{BRFL } +]_i, \dots \\ \langle \rangle \end{array} \right\} \right]$$

$$\begin{array}{c} \swarrow \quad \searrow \\ \boxed{2} C \left[\text{REFL } \langle \boxed{1} \rangle \right] \quad H \left[\text{SUBCAT } \left\{ \boxed{1}, \dots, \boxed{2} \right\} \right] \end{array}$$

(7) Control Principle (Gunji, 1987, (4.39), p. 117)

補語構造においては、親節点の SUBCAT 素性の値として名詞句があらわれ、それと単一化する名詞句が補語における範疇を値とする素性の値にあらわれる場合には、両者は単一化可能である。単一化が起るとき、親節点において統語的コントロールが起ると言う。

REFL 素性の値、および、SUBCAT 素性の値の中のそれと単一化する値である $\boxed{1}$ の NP がもつ BRFL 素性の + という値は、(7) で述べられているコントロールが起こったときに、親節点の REFL 素性の値が、それ以上に子の節点からの継承を受けずに空になることを保証するために導入されたものである。具体的には次のような素性共起制限を設け、(5) の FOOT 素性原理より優先されるとする。

(8) Bound Reflexive (Gunji, 1987, (4.41), p. 118)

$$\left\langle \text{SUBCAT } \left\{ \text{NP}[\text{subj}; \text{BRFL } +] \right\} \right\rangle \rightarrow \left\langle \text{REFL } \langle \rangle \right\rangle$$

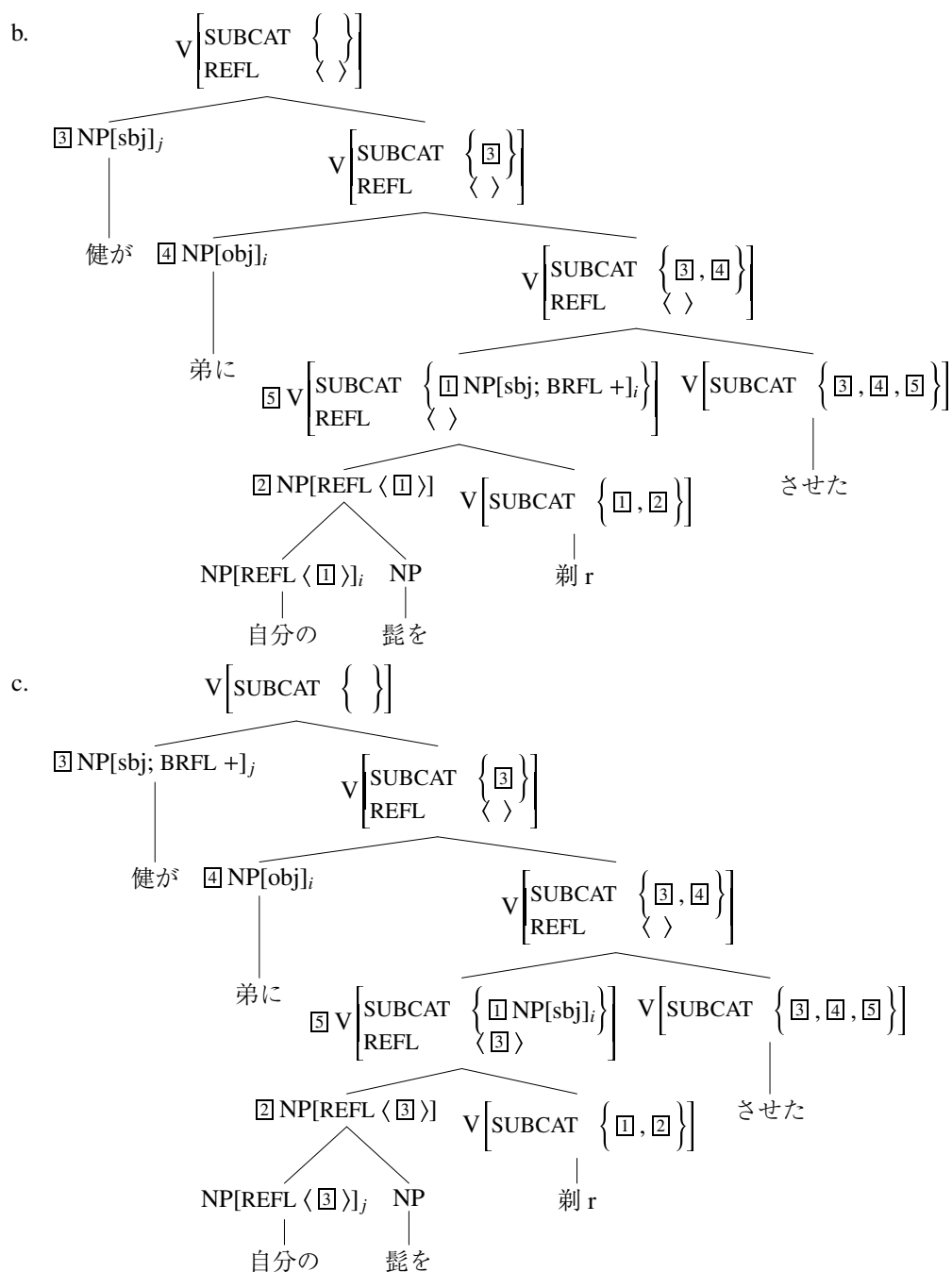
すなわち、SUBCAT 素性の値に BRFL 素性の値が + の主語名詞句が含まれる場合には、REFL 素性の値は空でなくてはならないという制約である。

(6) において、(他) 動詞句のレベルで REFL 素性が空になっていることに注意されたい。⁷ 端的に言って、(4b) の構造において、「自分」をコントロールしているのは主語の「健が」ではなくて、動詞「剃った」の SUBCAT 素性の中の要素である。そのため、親節点の動詞句においてはすでにコントロールするものが確定しているので、REFL 素性の値を保持しておく必要がない。(7) はそのように規定されている。

コントロールするものが SUBCAT 素性の値の中の名詞句範疇であり、文中に存在する名詞句とは限らないということは、次のような、使役文における一見したところ目的語がコントロールしているかのように見える文の分析に対して有効である。

(9) a. 健_jが弟_iに自分_{i,j}の髭を剃らせた (こと)。

⁷(6) において、親節点の SUBCAT 素性の値が主語の $\boxed{1}$ のみであれば、(自) 動詞句だが、SUBCAT 素性の値の中の「…」の部分に目的語があれば、他動詞句となる。他動詞句の例は次の使役文の (9c) で見る。



この文は多義的であり、文中で「自分」がコントロールされる構造としては (9b) と (9c) がある。

(9b) では、[5] の動詞句「自分の髭を剃 r」においてコントロールが起こっているが、この動詞句は「させ (る)」の補語として埋め込まれているので、文中に対応する主語をも

たない。「剃_r」の SUBCAT 素性の値の中の \square のタグのついた名詞句が「自分」をコントロールしているが、これは、次に示す、「させ（る）」の語彙的な性質により、その目的語と同一指標をもつ。⁸

$$(10) \quad \left\langle \text{「させ」}, \left[\begin{array}{l} \text{SYN} \quad \left[\begin{array}{l} \text{HEAD} \quad \textit{verb} \\ \text{SUBCAT} \quad \left\{ \text{NP[subj]}_j, \text{NP[obj]}_i, \text{VP} \left[\text{SUBCAT} \quad \left\{ \text{NP[subj]}_i \right\} \right] \right\} \end{array} \right] \\ \text{SEM} \quad \text{CAUSE}(j, \text{VP}'(i)) \end{array} \right] \right\rangle$$

すなわち、目的語が直接コントロールするのではなく、コントロールするものはあくまでも SUBCAT 素性の値の中の主語名詞句であり、文中の目的語はそれと同一指標をもつにすぎない。

一方、(10c) では \square の動詞句と「させた」を支配する他動詞句の節点でコントロールが起こっている。この場合には、コントロールするものは「させた」の SUBCAT 素性の中の、文全体の主語と単一化する \square である。

2.2 改訂版

以上が Gunji (1987) での分析の概略であるが、今日的観点からは、無闇に複雑であると言わざるを得ない。そこで、まず、HPSG の最近の記述 (Sag et al., 2003; Kim & Sells, 2008) により一層沿った形での改訂を考える。

今日の一般的なやり方に従い、単一の SUBCAT 素性の代わりに、主語の部分とそれ以外の補語の部分に分けて扱い、SUBJ 素性と COMPS 素性を導入する。これらの値は、一般には、各語彙項目に指定される項構造による項のリストを示す ARG-ST 素性の値を分割したものである。これにより、主語名詞句は SUBJ 素性の値としてあらわれる名詞句という形で規定できるので、文法関係をあらわす GR 素性は不要となる。

また、Gunji (1987) では、日本語のかき混ぜの扱いのために、SUBCAT 素性の値をリストでなく集合としたが、Gunji (1999) で示したやり方に従い、リストを値としてもつ素性を用いてもかき混ぜは扱えるので、SUBJ 素性および COMPS 素性の値はリストであるとする。「自分」という語彙項目は名詞句であるので、項構造をあらわす ARG-ST 素性の値は空のリストである。

以上より、(2) は次のように改訂される。

(11) Reflexive

$$\left\langle \text{「自分」}, \left[\begin{array}{l} \text{SYN} \quad \left[\begin{array}{l} \text{HEAD} \quad \textit{noun} \\ \text{REFL} \quad \langle \text{NP}_i \rangle \end{array} \right] \\ \text{ARG-ST} \quad \langle \rangle \\ \text{SEM} \quad \left[\text{INDEX} \quad i \right] \end{array} \right] \right\rangle$$

⁸Gunji (1987, (3.80), p. 60) では、「させ」の SEM 素性の値を λ 記法を用いて高階述語論理で与えているが、ここでは、項構造との対応だけを見ればよいので、指標を引数とする論理式の形で与えてある。VP' は埋め込み動詞句の意味に対応する述語である。

REFL は非局所素性 (nonlocal feature) として扱い、(5) を改訂した、次の原理に従う。

(12) **Nonlocal Feature Inheritance Principle** (cf. Kim and Sells (2008))

親節点の非局所素性の値は子節点の同じ素性の値の和集合から、そこで束縛されるものを差し引いたものに等しい。

Gunji (1987) で採用していた FOOT 素性原理との違いは、最後の「そこで束縛されるものを差し引いたもの」という部分であり、明示的に、束縛が起こった素性の継承を除外している。このため、(8) の素性共起制限は不要となり、それに伴い、BRFL 素性も不要となる。

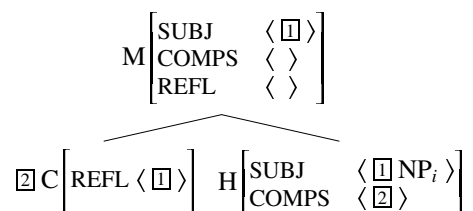
また、コントロール原理 (7) も、先に述べたように、本稿では統語的束縛と運用論も含めたコントロールとを区別して扱うので、「束縛原理」という言い方に変えておく。

(13) **Binding Principle**⁹

補語構造においては、親節点の SUBJ 素性の値として名詞句があらわれ、それと単一化する名詞句が補語における範疇リストを値とする素性の値にあらわれる場合には、両者は単一化可能である。単一化が起こるとき、親節点において統語的束縛が起こると言う。

以上により、再帰化構造は次のように簡潔な記述となる。

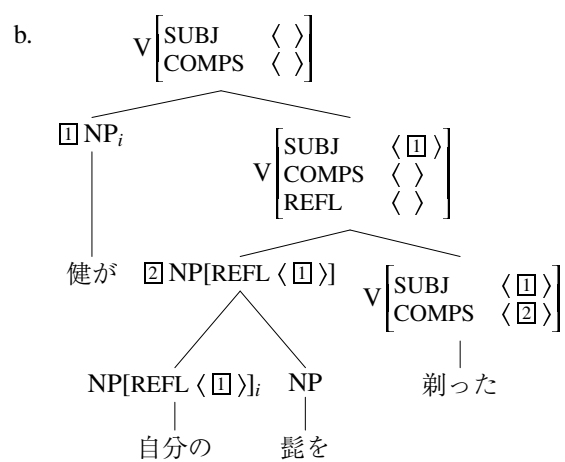
(14) **Reflexivization Structure**



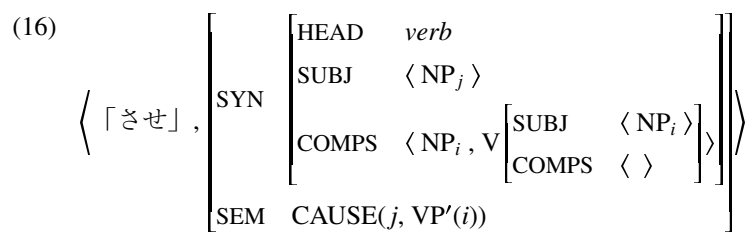
先ほどの例文の構造も次のようになる。

(15) a. 健が自分の髭を剃った (こと)。

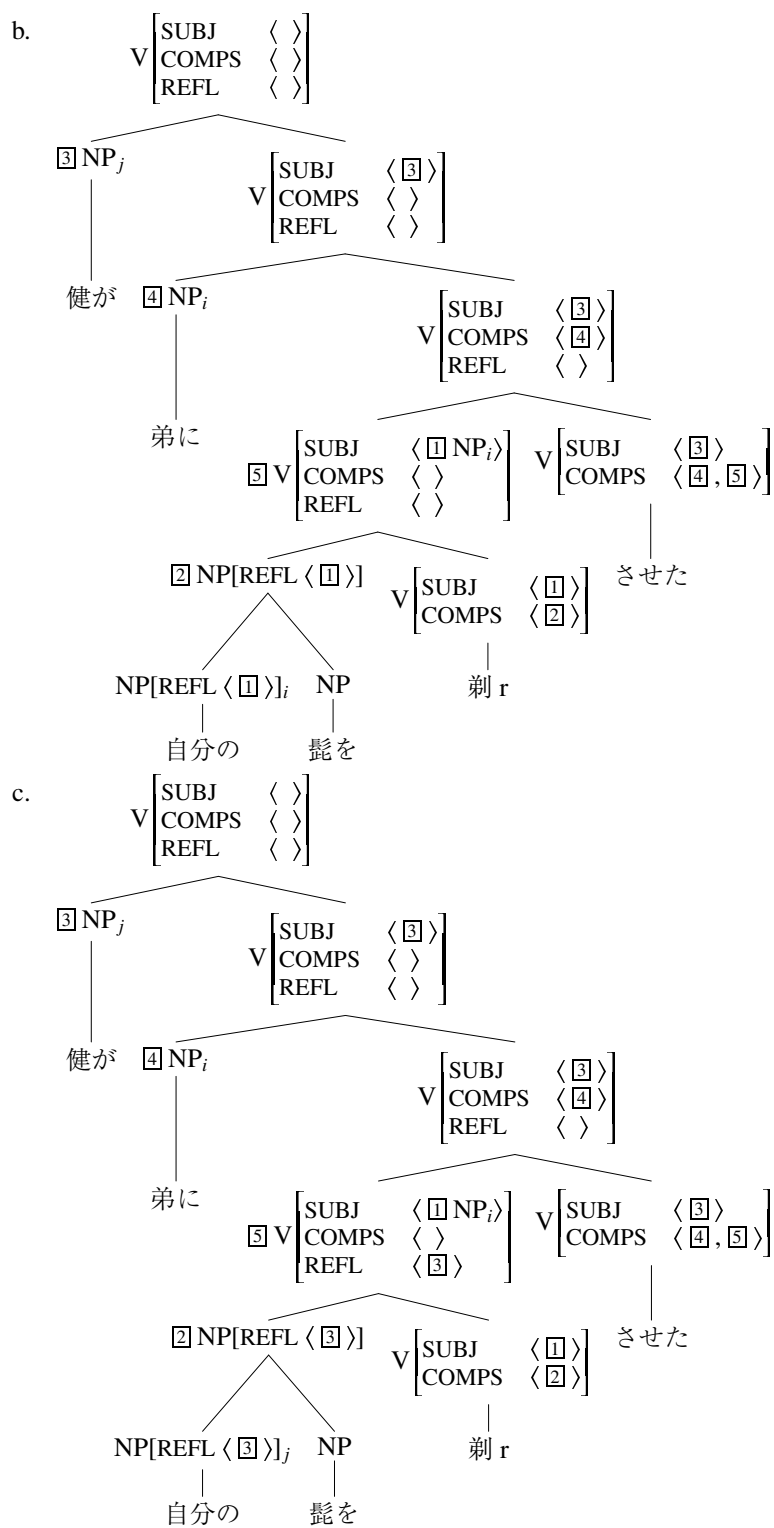
⁹Gunji (1987) の Control Principle は目的語による目的語の空所のコントロールも扱えるように SUBCAT 素性の任意の位置の項のコントロールが可能としているが、本稿における「自分」の統語的束縛では主語による束縛のみを考えるので、SUBJ 素性の値に限定して考える。



次に示す「させ」を用いて、使役文の例文も次のように分析される。



(17) a. 健が弟に自分の髭を剃らせた（こと）。



3. 日本語と英語の再帰化の比較

3.1 統語的束縛

Gunji (1987) の分析は、はじめにあげた性質の中でも、主語指向性と長距離依存性の記述に重点を置いたものであった。そのため、上記の束縛原理も、束縛は随意的であるとしてあり、同一節内で束縛されることが義務的ではない。

一方、英語などの言語では、再帰形の束縛は義務的であることが多い。それに従い、HPSG の束縛原理は次の形に述べられている。

(18) Binding Principle of HPSG (Sag et al., 2003, p. 207)

a. Principle A

ARG-ST 内に照応詞があるとき、それより上位にそれと同一指標をもつ項がなくてはならない。¹⁰

b. Principle B

ARG-ST 内に非照応的名詞があるとき、それより上位にそれと同一指標をもつ項があってはならない。

ここで「上位にある」(outrank) は、次のように定義される (Sag et al., 2003, p. 213)。

(19) a. 子と同一指標をもつ親は子と同位である。

b. ARG-ST 素性の値のリストの中で先行する項は後続する項より上位にある。

この分析を日本語に適用し、(18) に近い形で、日本語の「自分」の振る舞いを記述することを考える。

まず、照応詞の定義に関して、英語の MODE 素性は句の主要部から親に伝わるので、(15) の「自分の髭」のような、非主要部から親に情報が伝わる日本語の場合には有効ではない。したがって、非局所素性である REFL 素性を引き続き使い、「自分」の定義は (11) のままとする必要がある。すると、日本語の「自分」の統語的束縛に関しては、(13) の「自分」に関した部分を (18) に近い形に述べ直した次の形になる。¹¹

(20) 「自分」の束縛原理

ARG-ST 内に REFL 素性をもつ項があるとき、その最上位の項と REFL 素性の値とは単一化可能である。

例を見ると、(15) の場合には、「剃る」の ARG-ST 素性は次のようになる。

¹⁰Sag et al. (2003) では、意味的素性の 1 つの MODE 素性の値が ana のものを「照応詞」(anaphora) としている。

¹¹(20) において、「ARG-ST 内のより上位」よりもさらに限定して、主語に限るということを明確にするために「ARG-ST 内の最上位」(すなわち SUBJ 内) という言い方に変えておいた。また、原理 B は「自分」の束縛に関係しないので、原理 A に対応する部分のみを述べる。

なお、英語では単一化(統語・意味情報すべての一致)でなく、指標という、意味情報の一致のみを要求しているが、ここでは、従来通り単一化という言い方をしておく。これが強すぎる条件であるかは経験的に検討する余地がある。

また、英語の束縛原理とは異なり、日本語では、(17c) のような場合を許すために、単一化は義務的ではない。

$$(21) \left\langle \left[\text{「剃る」}, \left[\text{ARG-ST} \left\langle \boxed{1} \text{NP}_i, \boxed{2} \text{NP}[\text{REFL} \langle \boxed{1} \rangle] \right\rangle \right] \right] \right\rangle$$

(17) の場合には、(17b) の解釈では「剃る」の ARG-ST 素性は (21) と同じであり、「自分」は $\boxed{1}$ によって束縛される。一方、(17c) の解釈では、次の「剃る」の ARG-ST 素性に見るように、束縛は起こっておらず、次に示す「させ(る)」の ARG-ST 素性に見るように、「させ」の主語による束縛が起こる。

$$(22) \left\langle \left[\text{「剃る」}, \left[\text{ARG-ST} \left\langle \boxed{1} \text{NP}_i, \boxed{2} \text{NP}[\text{REFL} \langle \boxed{3} \rangle] \right\rangle \right] \right] \right\rangle$$

$$(23) \left\langle \left[\text{「させ」}, \left[\text{ARG-ST} \left\langle \boxed{3} \text{NP}_j, \boxed{1} \text{NP}_i, \text{VP} \left[\begin{array}{l} \text{SUBJ} \langle \text{NP}_i \rangle \\ \text{REFL} \langle \boxed{3} \rangle \end{array} \right] \right\rangle \right] \right] \right\rangle$$

3.2 非統語的コントロール

以上に示した、日英語の再帰形の分析を基にして、(15) (以下に (24a) として再掲) に戻り、これに対応する英語の文を合わせて考える。以下に示すように、英語でのこの文の直訳 (24b) は非文である。

- (24) a. 健_i が自分_i の髭を剃った。
b. *Ken_i shaved himself_i's beard.

ここで、「上位」というのは (c-) 統御よりも制限された概念であることに注意されたい。(24a) において、「剃る」の項は主語の「健」と目的語の「自分の髭」である。「健」は「自分の髭」より上位にあるが、「自分の髭」と「自分」とは同一指標をもたないので、同位であるとは言えず、したがって、「健」が「自分」より上位にあるとは言えない。すなわち、「上位」という概念では、(24a) の「自分」の束縛を捉えることはできないのである。¹²

英語でも、(24b) の「himself」の位置に再帰代名詞が生起しないことは、Ken が himself より上位にないために、義務的である原理 A に違反するからだと言することができる。¹³

ところが、(24b) のような環境において照応詞が一切生起できないとすると、また問題となる。例えば、再帰代名詞と同じように振る舞うとされている相互代名詞 each other に関しては事情が異なり、まさにこの位置に生起できる。

- (25) They_i shaved each other_i's beard.

この場合、They は each other より上位にないにもかかわらず、前者が後者を束縛しているように見える。Sag et al. (2003, p. 224) に従うと、このような位置にある each other は束縛原理の適用を受けない (exempt) とし、They と each other の間の依存関係は運用論などの別のメカニズムによるとすることになる。¹⁴

¹²一方、(c-) 統御によれば、「健」は「自分の髭」の中の「自分」を (c-) 統御するので、従来の考え方は先行詞となり得る。

¹³所有をあらわす NP's においては、's が主要部であり、NP はその項であると考えるので、(24) では、himself は 's の項であって、shaved の項ではない。

¹⁴このような exempt という考え方はすでに Pollard and Sag (1994, p. 257) で紹介されている。日本語での対応する場合は後述の (27) 参照。

すなわち、(24b) の所有形の位置は、本来照応詞が生起できる位置なのである。したがって、(24b) の *himself* も束縛原理の適用は受けず、そこで束縛される必要はないはずであるにもかかわらず、(24b) は全体として非文である。そこで、(24b) の非文性は、前述のように *Kim* が *himself* より「上位にない」ためとするのではなく、*himself* の格が対格であり、所有形にはならないためであると考えられることになる。つまり、次の文が非文であるのと同じ理由からであるとする。

(26) **Ken_i shaved him_i's beard.*

以上が Pollard and Sag (1994), Sag et al. (2003) による英語の分析の概略だが、では、(25a) の「自分」も束縛原理の例外として扱った方がよいのだろうか? 実際、日本語の「自分」には、束縛原理には従わないかのように見える例がある (郡司, 2002, cf. pp. 14–15, p. 158)。

- (27) a. 健の自慢は自分の学歴だ。
 b. 健がまた叱られた。自分が悪いのだから当然だ。
 c. 自分の不注意の結果の事故が健を後悔させた。

(27a) ではコピュラの「だ」の項は「健の自慢」と「自分の学歴」であり、「健」と「自分」の間に上位下位関係は存在しない。(27b) はそもそも文境界を越えているし、¹⁵ 2 番目の文では「自分」は主語という一番上位の項になっている。(27c) では「後悔させた」の目的語は「健」であるが、主語は「自分の不注意の結果の事故」であり、「健」が「自分」より上位であるということはない。¹⁶

したがって、日本語の「自分」の分析には、束縛原理による統語的な束縛以外の要素も考慮する必要がある、今までにも、例えば、郡司 (2001) で紹介したような様々なアプローチが提案されている。また、郡司 (2002, p. 158) で触れたように、そもそも「自分」(や「お互い」) が統語的束縛を受けるようなものなのかという問題もある (Hoji, 1998)。

しかし、統語的束縛と考えた方がよい文もある。例えば、「自分」の先行詞として、量化詞や NPI (否定極性表現) など、談話や視点などによる分析が通用しにくいものが来ている場合である。

- (28) a. 3 人に 1 人が自分の髭を剃った。
 b. 誰も自分の髭を剃らなかった。
- (29) a. ?3 人に 1 人の自慢は自分の学歴だ。
 b. ?誰の自慢も自分の学歴ではなかった。
 c. 3 人に 1 人が叱られている。?自分が悪いのだから当然だ。
 d. 誰も叱られていない。?自分が悪くないのだから当然だ。

¹⁵いわゆる *remote control* の例 (Dowty, 1989)。

¹⁶これらの例文はいずれも、先行詞が主語であるとか、「自分」を (c-) 統御するという条件に対しても例外となっていることに注意。その意味では、どのような統語理論でも扱いの困難な文である。

- e. ?自分の不注意の結果の事故が3人に1人を後悔させた。
- f. ?自分の不注意の結果の事故が誰も後悔させなかった。

「3人に1人」や「誰も（～ない）」のような談話的な先行詞を設定しにくい主語が来ても、(28)の文は成り立つが、(27)の「健」をこれらの名詞に変えた(29)の容認度は少し落ちるように思われる。¹⁷

そこで、英語と異なり、日本語では(28)の環境は統語的束縛の除外ではなく、あくまでも束縛を受けるところと考えた方がよいことになる。

4. おわりに

日本語の再帰形の解釈は局所的な束縛による場合と非局所的なコントロールによる場合がある。本稿では前者に限って、その形式的な記述を、Gunji (1987)を改訂する形で考察した。非局所的・非統語的なコントロールのメカニズムには視点などの要素が入ることが指摘されており、¹⁸ 統語的束縛と非統語的コントロールを統一的な枠組で記述する必要があるが、本稿ではそこまで議論を発展させる余裕がなかった。別の機会をまちたい。

参考文献

- Dowty, David R. (1989). On the semantic content of the notion of 'thematic role'. In Chierchia, Gennaro, Partee, Barbara H., & Turner, Raymond (Eds.), *Properties, Types and Meaning*, Vol. II, pp. 69–129. Kluwer, Dordrecht.
- Gazdar, Gerald, Klein, Ewan, Pullum, Geoffrey K., & Sag, Ivan A. (1985). *Generalized Phrase Structure Grammar*. Basil Blackwell, Oxford.
- Gunji, Takao (1987). *Japanese Phrase Structure Grammar*. D. Reidel, Dordrecht.
- Gunji, Takao (1999). On lexicalist treatments of Japanese causatives. In Levine, Robert & Green, Georgia (Eds.), *Studies in Contemporary Phrase Structure Grammar*, pp. 119–160. Cambridge University Press, Cambridge.

¹⁷筆者は(28)と(29)の間に微妙な容認性の差を感じるが、話者によってはその差はほとんどないかもしれない。これは、郡司(2002, p. 158)でも触れたように、そもそも「自分」がかなり広く非統語的束縛を許すためであるかもしれない。「自分」を「自分自身」に変えた場合には容認度の差が拡大するだろうか。

- (i) a. 3人に1人が自分自身の髭を剃った。
- b. 誰も自分自身の髭を剃らなかった。
- (ii) a. ?3人に1人の自慢は自分自身の学歴だ。
- b. ?誰の自慢も自分自身の学歴ではなかった。

あるいは、郡司(2002)で用いた「それ」に変えてみる。

- (iii) a. 3社に1社がその弁護士を解雇した。
- b. どの社もその弁護士を解雇しなかった。
- (iv) a. ?3社に1社の自慢はその弁護士だ。
- b. ?どの社の自慢もその弁護士ではなかった。

これらにおいても、容認度の差が大きくないのであれば、(29)のようなパターンにおいても統語的な扱いを考えなくてはならなくなるだろう。

¹⁸郡司(2001)であげた文献、およびNishigauchi(2009)などを参照。

郡司隆男 (2001). 日本語文法—多様な観点から—. 『日本語文法』, **1**, 70–89.

郡司隆男 (2002). 『単語と文の構造』. 岩波書店, 東京.

Hoji, Hajime (1998). Otagai is NOT a local anaphor. Unpublished manuscript. University of Southern California. (Presented at WCCFL 17 as ‘Otagai’, whose abstract is available at <http://www-rcf.usc.edu/~hoji/Abstracts/WCCFL97abstract.PDF>).

Kim, Jong-Bok & Sells, Peter (2008). *English Syntax: An Introduction*. CSLI Publications, Stanford.

Nishigauchi, Taisuke (2009). The Awareness Condition and the POV Projections. *TALKS (Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin)*, **12**, 37–49.

Pollard, Carl J. & Sag, Ivan A. (1994). *Head-Driven Phrase Structure Grammar*. The University of Chicago Press, Chicago.

Sag, Ivan A., Wasow, Thomas, & Bender, Emily (2003). *Syntactic Theory: A Formal Introduction, 2nd ed.* CSLI Publications, Stanford.

Author’s E-mail Address: gunji@shoin.ac.jp

Author’s web site: <http://sils.shoin.ac.jp/~gunji/>